

## 目録が語る歴史家西川正雄

西川正雄文庫は、1994年から2004年まで本学文学部教授をつとめられた故西川正雄氏の遺された蔵書および資料計約15,300点から構成されている。西川氏がお亡くなりになったのち、これらは夫人である西川純子氏より専修大学に寄贈され、整理・分類がすすめられてきた。うち書籍約14,700点は寄贈前にリストが作成されていたこともあり、すでに配架済みで多くの学生、教職員に活用されている。資料に関しては、その内容が多岐にわたっていたことなどから作業終了まで時間を必要とした。こうして西川氏の没後10年にして整理は完了し、冊子体目録が完成した。この間、尽力された多くの関係者には深く敬意を表したい。

周知のように、西川氏はドイツおよびヨーロッパ近現代史研究の泰斗であり、とりわけ国際的な社会主義運動史に強い関心を寄せていた。さらに、自他ともに認める「調べ魔」であり、不明な点をとことん追究しないと気がすまない人だった。研究に対するこうした氏の姿勢は、目録からも見て取ることができる。例えば、本文庫の特徴のひとつは西川氏が敬愛してやまなかったローザ・ルクセンブルク関連文献を含んでいる点にあるのだが、氏は入手可能なあらゆる版のローザの著作・書簡はもとより、彼女に関して書かれた各国語の書籍・論文や研究機関の発行したパンフレット類などに至るまで細大もらさず収集した。その徹底ぶりは、インドで出版されたもののISBNが付されていないために取次店を通じて取り寄せ不可能だった書籍でさえも、手を尽くして最後には入手するほどだった。図書館における分類の都合上、これらは書籍と資料とに分けて配架されることになったが、他に類を見ない一大コレクションと呼ぶべきものであり、今後のローザ・ルクセンブルクおよび社会主義運動史研究になくてはならない価値を持つものである。

本文庫目録が示しているのは、しかし、徹底的に細部にこだわる西川氏の姿だけではない。目録からはむしろ、「調べ魔西川正雄」という認識がいかに関面的であるかを知ることができるのである。今回、目録作成の準備段階で、私は資料群の整理・分類を手伝う機会を得た。ファイルに几帳面に収められた資料を一点一点確認してゆくと、前述したローザ・ルクセンブルク関連文献の他に、『角川世界史辞典』や『世界史史料』など歴史研究における参照ツールを編纂作業した際の記録、「ゴールドハーゲン論争」や「マルコ・ポーロ事件」などその時々で議論に付された歴史問題に関する新聞・雑誌記事等の資料、リンツ会議、日中韓歴史家会議など国際交流の記録、そして歴史教育と歴史教科書問題をめぐる研究会活動記録など、専門領域とされていた社会主義運動史研究をこえた西川氏の多岐にわたる精力的な活

躍が詳細に残されていた。これらの資料が意味するのは、氏が単に細部にこだわりを持つ人であったということだけではない。徹底的に調べ尽くし検討し尽くす西川氏の史料批判の手法が、生前に口癖のように言っておられた「自前の歴史学」や「世界史」の構築、そしてとりわけ晩年に熱心に取り組んでおられた東アジア諸国の歴史家との対話や歴史教育問題への取り組みと、密接に関連していたことをはっきりと示している。

資料のなかには、個人情報との関連で現時点では閲覧の対象とせず、本目録には掲載されなかった部分もある。それらについては、将来的に研究の対象とされることにより、目録掲載分の資料とあわせてあらためて歴史家西川正雄の人間像とその知的営みの総体を理解する助けとなるだろう。そう考えるなら、西川正雄文庫は、その本当の価値がこれから明らかにされる、そういう可能性を秘めた資料なのである。

2018年11月

文学部教授 日暮美奈子